プロレタリア通信

53号
2013年
1月31日

発行人　共産主義者同盟プロレタリア通信編集委員会
発行所　豊島文化社　〒171-0021
東京都豊島区西池袋2-38-6　第一後藤ビル4F
TEL&FAX　03-3981-2887
郵便振替口座　00110-0-77358
年間購読　発送費込　一〇〇〇円　一部　二〇〇円

2013年を新たな変革と連帯の年にしよう！

発再稼働阻止、沖縄の米軍基地撤去、反貧困の闘いに連帯し改憲を推し進める安倍政権を打倒！プロレタリア世界革命へ！

北村　裕

1　一層深まる資本主義の危機と、民衆の闘いの高揚

２００８年のリーマンショックを契機に世界的に拡大した金融恐慌は、特にＥＵ諸国に深刻な債務危機をもたらし、今もなお深刻な事態が進行している。債務危機によって国債が下落し、財政運用が危機的な状態に追い込まれている。そのためＥＵ及び欧州投資銀行（ＥＩＢ）に国債買い支えなどの資本援助を仰がざるを得なくなり、引き換えに、過酷な財政緊縮が要求されている。各国において緊縮政策がとられ、それは公務員の大量解雇や給与削減に向かわざるを得ず、大量失業、経済活動の減少が余儀なくされ、それは社会福祉費用の縮小をともなう事態になっている。まさにこのことは政府の損失の負担を99％の貧しい人々、労働者、市民へ転嫁するものであり、階級的な攻撃そのものである。

ＥＵ諸国では深刻な失業問題が依然として続いている。失業率はＥＵ27カ国全体で10・7％で、15歳から24歳の若者でみると、ギリシャ56・0％、スペイン54・7％、ポルトガル39・0％、イタリア35・9％、ＥＵ27カ国全体では23・2％（２０１２・10）である。

このような深刻な世界恐慌を背景として、ヨーロッパばかりか世界的に労働者階級・民衆の憤りが高まっている。昨年秋、欧州各国においては、反緊縮デモ・ストライキが頻発した。11月には、ＥＵと政府の反社会的な削減政策に反対するストライキとデモが行われ、ヨーロッパ23か国の労組を中心に数百万人が参加している。この様に新しい動きとして、欧州の労組が統

●つながろうフクシマ！　さようなら原発　大行動

■日時：３月９日（土）14：00開会　15：15パレード出発
■場所：明治公園
■内容：発言：大江健三郎（作家）鎌田慧（ルポライター）など

●つながろうフクシマ！　さようなら原発　講演会

■日時：３月11日（月）18：30開～20：30　■会場：きゅりあん
■内容：出演：大江健三郎（作家）鎌田慧（ルポライター）坂本龍一（音楽家）など
■主催：さようなら原発一千万署名　市民の会
連絡先：さようなら原発1000万人アクション実行委員会　TEL03-5289-8224

一して、抗議行動が行われるようになったばかりか、学生を中心とする若年層などへの波及など、他の社会階層にまで広がる動きが起こってきている。

２０１０年から２０１１年にかけてチュニジアで勃発し、またたく間にエジプト、イエメン、リビア、シリアなどアラブ世界に波及した民衆蜂起は、失業率の高さと貧困に対する不満からこれらの国では独裁政権を打倒したが、それはまた、長期の圧政に対して「自由」を求めるものでもあった。この様な動きは、中国、ギリシャ、スペイン、ロンドン、パリなど世界各地で起こっており、２０１１年9月には、アメリカのウォールストリート街が多くの人たちで占拠された。特に若者の雇用に対する不満は大きく、憤りのもととなっている。

3月11日、東日本大震災と共に起こった未曾有の「福島原発事故」は、この様な世界的な民衆の憤りのあらしの中で、我が国に起こったものである。まさに、「人災」としか言いようのないこの事故によって、福島の人だけではなく、多くの人々が放射能汚染にさらされ、原発の再稼働を許さない声が大きくあげられている。昨年3月からは毎週金曜日に首相官邸前で抗議行動が行われ、10万を超える、世代を超えた人たちの声が挙げられ、今も続いている。

こればかりではない。２０１１年9月に、市民が中心になって経産省の敷地に建てられたテント（現在3つ建てられている）は、今年になって４７８日を越そうとしている。これまでの国の原発推進・再稼働への異議申し立ての全国の拠点として、前線基地として活動している。先に見た世界の民衆の大きな憤りの中で、注目されている活動であり、私たちもまた、これを支える活動の一翼を担っている。原発をめぐる攻防は昨年「再稼働阻止全国ネットワーク」や「被ばく労働を考えるネットワーク」が結成され、今や全国的な結合と陣形が構築されているのである。

このように金融危機と原子力発電をめぐって、世界の民衆は「我々は99％だ」と叫び、あらゆるものを拒絶し、あらゆるものを占拠していこうとして、直接民主主義的な生のエネルギーがあふれている。この様な蜂起や占拠の大衆化、世界化は、新しい動きの始まりを示している。

2　衆議院選の結果と改憲をもくろむ安倍政権

昨年12月に行われた衆議院選挙によって、衆議院における政党配置が変更された。自民党（２９４議席）、公明党（31議席）が定数の3分の2以上の議席を確保し、民主党は57議席にとどまり、第一党の座を退いた。日本維新の会は54議席を獲得し、民主党に迫る第3党となった。みんなの党は、18議席。これにより、安倍自公連立政権が復活することとなった。投票率は、全体で、小選挙区59・32％、比例代表59・31％と、戦後最低を記録した。比例代表の各党の得票率は、自民党27・6％、維新の会20・4％、民主党16・0％、みんなの党8・7％の順となったが、自民党の得票は前回（26・7％）とほとんど変わらない数値であり、このことは、何よりも民主党の敗北を示している。民主党は前回42・4％を獲得していたからである。このことから決して自民党が躍進したものでないことは明らかである。

12月26日に安倍政権が成立した。安倍政権がやろうとしていることは、経済政策においては3本の柱を打ち立て、①「大胆な金融緩和」、日銀に2％の物価上昇を目標に無期限の金融緩和を行わせ、②「機動的な財政政策」、国債を増発し、公共事業を柱とする２００兆円もの緊急経済投資を行い、③「民間投資を喚起する成長戦略」、企業に対する税制の優遇や規制緩和、構造改革を推進すること、が掲げられている。その他、原発ゼロから、原発再稼働、原発輸出を推し進めること、生活保護給付を給付水準原則1割削減し、社会保障費用を削減する。日米同盟を強化し、集団的自衛権の行使を容認する。改憲を行う方向を打ち出し、当面は改憲の手続きを緩和する憲法96条の改正を行う、「我が国の領土、領海を断固として守り抜く」という強行姿勢、などがあげられる。

3　治安管理を許さない闘いを

障害者に対しては、昨年3月、「障害者自立支援法」の改定にすぎない「障害者総合福祉法」を民主、自民、公明の3党による強行採決で可決させている。「障害者自立支援法」は、地域で生活する身体、知的、精神の障害者が強く反対し、生存権、幸福追求権を侵害しているとして違憲訴訟が提起され、２０１０年1月に民主党との間で自立支援法廃止を確約する合意文書が取り交わされ、和解となった経緯があるにもかかわらず、応益負担、報酬の日額払い、障害程度区分などを温存したまま、これを「改定」したのである。

また今年は、保護者に過重な負担を強いてきた精神保健福祉法の改定が予定されている。医療保護入院について、①保護者の同意を必要としない入院手続きにする、②入院当初から早期退院を目指した手続きを導入する、③権利擁護のために本人の気持ちを代弁する人を選べるようにする、④早期退院を促すよう入院に関する審査を改める、として、具体的には精神保健指定医1人の診察で入院できるようにし、入院後早期（例えば72時間以内）に病院の退院支援担当者が本人・家族から聞き取りをし退院に向けて支援することを明確に伝えるほか、入院から10日以内に都道府県に提出する入院届に合わせて入院診療計画も提出するよう改める、とするものである。

その他、「医療観察法」は、２００５年に施行されて7年6か月を迎えている。昨年7月、法務省、厚生労働省は「施行状況についての検討結果」を報告している。それによると、「医療観察法の施行状況はおおむね良好であり、有効に機能している」との評価を与え、改定する必要はないとの結論を下している。しかし、指定入院医療機関設置

沖縄大問題シンポ

STOP!　高江・辺野古・泡瀬・大嶺

2013年2月23日（土）
13：00～17：00（12：30開場）
●場所：台東区民会館（特別会議室）
参加費：資料代として1,000円をいただきます。
■主催団体
沖縄・生物多様性市民ネットワーク
沖縄環境ネットワーク
NPO法人ラムサール・ネットワーク日本
■連絡先
花輪伸一（沖縄・生物多様性市民ネットワーク）
　TEL 090-2452-8555
陣内隆之（沖縄環境ネットワーク）
　TEL 090-8179-2123
安倍真理子（NPO法人ラムサール・ネットワーク日本）
　TEL 03-3553-4103／080-5067-0957
※参加申込は不要です。当日会場へお越し下さい。

が計画通りに進まず「手厚い医療」は崩壊し、「長期入院」や、「社会的入院」が引き起こされており、何よりも17名の自殺（入院中3名、通院中14名）や23名の自殺未遂が、入院や通院の処遇の中で引き起こされており、「手厚い医療」の中身こそが問われなければならない。精神障害者はまさに「医療観察法」の施行によって、さらにスティグマに晒されることになったのである。6罪種に限って、それも病気の重さには関係なく、お金をかけ、閉じ込められ、再犯防止を目的に、精神障害者は危ないもの、「同様な行為を行なう具体的現実的危険性」があるとして医療を受けなければならず、そこにはインフォームド・コンセントも自己決定権も認められていない。その上、情報公開はほとんどなされないまま、地域の関連諸機関に、本法の対象者であることを知らしめられてしまうのである。

更に、今回の「震災」「原発」の動きの中で、治安管理の一層の強化が為されようとしている。2011年に共謀罪と連動する「コンピューター監視法」が制定され、今後「刑の一部執行猶予」「共謀罪新設」「共通番号制度」「新たな捜査手法」等治安立法の導入が日程に上っている。最近の司法の動きには「重罰化」と「再犯防止」の思想が流れていて、これは死ぬまで監視・管理し、危険とみなせばいつでも収監できるようにするという攻撃に繋がっている。

安倍政権は原発再稼働、憲法改悪、日米同盟の強化、規制緩和、治安弾圧の強化などを加速させようとしている。これらは一体となったものであり、私たちもまた、原発再稼働阻止、オスプレイ配備撤回、普天間基地撤去、反貧困・失業の闘いをともに多くの仲間と連帯して、これらの動きに対決していかなければならない。

2013年の年頭に当たり、この様な攻撃に総反撃する陣形の構築と決意を新たにしよう。

共に、激動の2013年を連帯して闘い抜こう。

安倍政権を打倒しよう。

テント日誌

三上　治

12月5日 経産前省テント広場 ――452日目

深夜のテントに伝えられた死

寒さのきつくなったテントの中で談笑しているところに電話がきた。午後の11時も少しを回ったところであろうか。Yさんが危ない。持ちそうもないという連絡だった。Yさんは先週の終わりころに脳内出血で倒れ大阪で入院していた。突然の知らせに場は一瞬シーンとなった。ポツリポツリと彼のことが話だされていた。11時半も過ぎたころには亡くなったという知らせが届いた。重たい気分の中で臨場の通夜のようなことになった。

テントに関係していた人たちのうちで亡くなったのはこれで四人目である。もちろん、これは私たちが知っていて、比較的身近な人でという意味である。私たちの知らないところで亡くなった方もおられるのかもしれないが、この四人はテントに出入りし、よく知られた人たちである。彼らは私たちのこころにどこか重いしこりのようなものを残して行った。Yさんもまた。彼はふっと私たちの中に訪れてその生前の姿や表情で何かを思い起こさせるのだと思う。そして私たちはそこで何事か話し語る。相手ならざる相手に向かって、いや自分に向かってである。

Yさんとは「9条改憲阻止の会」からの付き合いなのであるが、彼は大阪のグループから派遣されているような形で活動をしていた。笑顔が人の警戒を解くところもあり、人懐こさもあって人気があった。3・11以降はテントの立つ前まで私たちは福島の子供たちに箱根の水や果物を運ぶ活動をしていた。彼はその中心的なメンバーの一人であって箱根や伊豆に、また福島に出掛けていた。そしてよく車の中でかつての活動についてあれこれ話をした。これらはとても興味深いものであった。彼はおくびにも出さなかったけれど、ある時代の闘いの中での挫折を背負っていて日々を再起という形で関わっていたのだと推察されるところがあった。人は他者からは想像できないような挫折や屈折、あるいは言葉にならない世界を背負っているものであるが、それを短い付き会いの中で感得させるようなところがあった。それは彼の人柄と言っていいとのだろがそれだけに得難い人だったのだと思う。

昨年の9月11日にテントが出来てから彼はあたかも主のような存在であった。

テントの奥に座り込んでいたが彼が居る事で安心めいたものを周囲に与えていたのである。テントの初期はこれがどのように存続できるのか見通しも立ち難い中で、権力側との緊張感は強かった。だから、テントを支える面々には心的な重圧のかかる日々だった。個々が想像し、自分なりの闘いでテントを支えると覚悟するしかなかったのであるが、彼はそれを言葉少なく引き受けていて周りには力強い存在となっていた。なかなか、宿泊態勢も整わない日々の中で彼はその多くを背負っていたのだ。彼にはこのテントひろばをつくり維持していくことが、かつての運動を超えて行くことであると考えられていたのかもしれない。そんな希望が彼の腰の据わった行動にはあったのだろうと思う。

彼とは脱原発の運動で全国にテントが出現して、テントで繋がるようなことがあるといいなとよくはなしあった。デモや集会という意思表示の伝統的な形態に併行してもう一つの陣地戦的な運動形態が出現することを望んでいたのだろうか。脱原発の運動が長期的である必然の中でその運動的なありようを考えていたのだと思う。彼には経産省前のテントが持続するだけでなく、社会《生活や地域の場》に向かって降りて行き、またそこから出てくる運動の契機になることがイメージされていたのではないかと推察する。テントはその出発であることが意識されていたのだと思う。脱原発の運動が本当の

意味で国民的運動になって行くイメージを話し合ったが、テントが全国に出現するのはその一つだったのだ。

彼は大飯での原発再稼働の日程が浮上するや、大飯の現地にテントを張った。彼は経産省前テントから活動の場を大飯に移しその中心として活動した。最初は港の近くで張られたテントは大飯の丸山公園に移ってから本格的なものになった。このテント村を訪れた時には彼は嬉しそうな様子で説明してくれた。経産省前テントとは幾分か様子は違っていたが、それを語るかれの表情は生き生きとしていた。大飯現地での再稼働をめぐる闘いにおいて彼の果たした役割は大きなものがあったと思う。そしてこれは大阪でのテントに引き継がれて行ったし、彼はまたそこでもまた精神的主柱のような存在だったのではないか。彼にしてみれば経産省前のテントひろばから得たものを次の場で実践し、今後の再稼働をめぐる運動や闘いのあり方を示唆するものを生みだしたのだと思う。いつか福島県庁前にテントひろばが出来るといいなと話しあったこともあるが、持続的で社会の深部に向かう闘いを願っていた彼の一端は実現されたのだ。

私たちは一種の敗戦とでも言うべき場所にいつの間にか追いつめられていると感じる他ない日々の中で、安倍が提起した憲法改正の動きに危機感を持って再結集のような形で集まった。その中で私たちは出会った。あれから、国会前の座り込み等いろいろとやってきた。濃霧に遮られたような視界の切り開けない時代の中で闘ってきた。多くの時を過ごす中で気になっていたのは生き急ぐような彼の姿勢だった。周りの誰もが気がつきながらも、また、誰も止められなかったことだ。これには悔いも残るが、でもこれはどうしょうもなかった。ただ、彼はよく生きよく闘ったというのは周りの者の偽らざる感想がこれに対する救いなのか知れないと思うこともある。言いわけかもしれないが……

Yさんよ、私たちは偶然の契機で出会い、偶然のように別れて行く。しかし、その中で何かが残る。それは人の生の中で生き続ける。別れは様々だが死という別れだって同じだよね。君のことは私の中で時に思い出すようにしかないのだとしても、君の笑顔が忘れ難いように君のことも忘れ難いと思う。ただ、今はやはり君と出会えたことをありがとうといいたい。私のこころに扉はない、かつてに来てくれてひと時を過ごしてくれたらこんな嬉しいことはないと思う。私が呼び出すのだとしても同じ事だ。

テントに訪れた愛媛大学の先生と話したことを記したかったのであるが、訃報に接してのこんな風になってしまった。これはまたの機会に。

12月12日 経産前省テント広場 ――458日目

それでも変わらぬ師走の日々

テントのうちにはYさんの遺影が飾られている。誰が持ちこんだのか知らないが穏やかな表情である。でも、向かい合うと何を言ったらいいか戸惑いもする。彼のことは前回に書いたのだが、少し付け加えれば彼は結構激情的なところもあって怒鳴り合いのようなこともした。この歳で怒鳴り合いなどすると後に引くものだが、それはなかった。不思議なことだがそれは気持ちがよかった。それに彼は人に対する気遣いは細やかであった。活動家生活での苦労から身に付けたものか、活動する人への見えないところでの配慮ができていた。

テント設立のはじめのころKさんという女性がいた。彼女も昨年の暮れに亡くなったのであるが彼女は従来の活動スタイルから見れば異質な存在で周りからは反発もあった。泊りのメンバーが足りなかったとき彼女は率先してそれをやってくれた。そして、朝一番で自転車でゴミを自分のアパートまで運び処置してくれた。そんな彼女のことに何くれと気配りしていたのはYさんであり、彼女を影で支えてもいた。彼女のことは彼からも相談されたこともある。今頃はあちらの世界で再会してテントのその後のことでも話しているのだろうか。

財務省の前に選挙の宣伝カーが停まり演説をはじめた。某宗教団体の車で教祖が登場するとあって動員された信者が経産省前などにも人が集まっていた。選挙の風景としては良く見るものだが、これが財務省前というのは見なれないものである。この団体の政治宣伝であるためだろうか。帰りにテント前を通る信者たちはテントの人たちが金で動員されていると悪口をわめいて行くが、これは自分たちが金で動員されていることを告白している（?）のだろうか。街宣車の右翼も良く似たことを言うのだが、これは彼らの実態の裏返された表現なのだろうと推察しえる。せめて政治的な信念や主張で批判をすればいいのにと思うけれどなかなかそうはならない。

前回、書き残した愛媛大学の先生の話を記す。愛媛大学では農業や漁業に携わる科が設けられその最初の卒業生たちが就業したとのことだが、高校に自然エネルギへの転換の対応する科の設置構想を持っているのだという話だった。脱原発の運動は社会の転換を内包しており、それは原発からのエネルギー転換が経済社会の構造を変えていくということでもある。これは自然発生的な形での再性エネルギー等への投資等として現れている。原発再稼働がなければ飛躍的に進むものであり、産業経済のイノベーションとしても内需拡大としても進展するものだ。第二次産業経済を中心とした高度成長経済の転換が不可避な今、これは未来の道である。

そうした人材を育成する構想だったのだがいい話だった。みえないところでこういうことをやっていることはこちらも元気づけられる。再稼働反対という政治的運動の背後にはこうした社会的行為が呼び起こされているのであり、これが以前の脱原発からは発展している要素であり可能性である。社会の構成の転換に呼応することで官邸前行動のテントも政治的枠組みを超えた広がりを形成している。ある程度は想像できることだがその動きが見えるのは嬉しい。

逆にいえば官僚や電力会社という独占体の再稼働はこうした社会の動きを押しつぶそうとしている。そこに彼らの既得権益が侵される恐怖があり、敵対戦略がある。こうした直接には見えない関係で広がるところに脱原発運動の可能性があるのだが、それを実感させてくれる話だった。

9条改憲阻止の会
http://9jyo.asia/
e-mail: kyujokaikensoshi@utopia.ocn.ne.jp
TEL・FAX 03-3356-9932

テントから全国・全世界へ！
あおぞら放送　テントから～
毎週金曜日　pm4：00～5：00　生放送
（いつでもアーカイブでご覧になれます）
http://www.ustream.tv/channel/tentcolor

追悼
見崎信義さん

北村　裕

見崎信義さんが、今年の1月10日の早朝に亡くなった。とても安らかな顔をされていたという。3年前望月彰さんが亡くなった時、一緒に千葉まで行ったのが最後になってしまった。

初めて会ったのは、70年。安田講堂に立て籠って逮捕され、出てきたTさんを通して話すようになりやがて行動を共にする。見崎さんは、静高、早稲田大学と進み、マル戦派を体現したかのように、早稲田での運動から志村化工での「工場占拠闘争」を経験していた。その敗北後、行動委員会運動から首行連（首都圏行動委員会連合）活動へと連なる流れの中で、行動を共にした。いつも、穏やかだが弁舌爽やかで、断固として行動する憧れの的であった。

その当時の彼は、運動のかたわら、cafeと文学とクラシック音楽に取り囲まれて過ごし、今はもう名前を忘れたが、よく池袋のcafeで過ごしていたのを思い出す。やがて、組織を離れ、自治労のオルグになり、次にあったのは、脳梗塞を起こした直後の病院の一室であった。今はきっと、あの世にいっても、広角泡を飛ばしながら、議論しているに違いない。いろいろとお世話になりました。僕は、まだしばらくここを離れませんが、待っていてください。

4名の仲間を悼む

羽山太郎

テント500日

経済産業省正面玄関脇テント、3張は1月17日494日を迎えた。

高さ2m、タテ、ヨコ3m、5mのテントは夏は暑く冬は寒い。夏の風は霞ヶ関特有の排気ガスとともに熱風となりテントに入り、冬は冷気としてテントに浸み入る。

2011年9月11日、全国集会の日にテントをわずか10数分で1張り、つづいてフクシマの女たちのテントが、全国からの支援テントがと、たてつづけて3つのテントが張られたのである。

9月11日より今日まで、核と自然・人間は共存・共生できないと活動してきた人々。経済成長より今を生きること、今の経済と生命・いのちを大事にすること、原子力核発電の再稼動に反対してきた人々。

暑さと寒さに耐えつつテントにかよい、テントに泊まり、テントで多くの出会いをつくってきた人々。

こうしたテントを支えてきた人々の内、4名が生命をおとした。

久保田千秋（59才）
蔵屋敷有紀（31才）
前澤奈津子（67才）
2012・5・7
吉岡　史郎（64才）
2012・12・4

それぞれとの出会いについて述べ追悼としたい。

久保田千秋さんは2010年私が起した「日米安保条約破棄・米軍座間基地撤去」の公判をただ1人傍聴にきてくれた。結審はわずか5分もかからず、公訴棄却などである。それでも毎月1回6回・6ヶ月ぐらいは公判・審理はあった。この公判から結審まで久保田千秋さんはつき合ってくれた。

前澤奈津子とは丸50年近いつき合いである。同郷・福島県出身同志と言うこともあり、何かと気になり直接交流のなかった期間を含めても細々と交流はつづいてきてきた。

2011年3月11日、福島がフクシマとなって、日常的に交流することとなった。私になにが出来るのか、どうすれば良いのか、日々悩む日がつづいた。そうした折、前澤奈津子の事務所・神田神保町のM企画に通った。

私は予兆もなしに、5月11日突然「大腸がん」にて入院することとなった。

前澤奈津子も2011年5月にがんを告知され、駿河台日大病院に通うこととなったのである。

私は12月12日手術にて、がん細胞の一切を摘出に成功した。

しかし前澤奈津子は薬事療法以外手遅れ状態であった。

2012年に入ると抗がん剤療法（化学療法）に拒否反応が出るようになる。私は12月12日手術――12月26日退院、退院後の再発防止のための化学療法はキツクこれを拒否する。

前澤奈津子も4月に入るとさかんに、化学療法をやめれるものならやめたいと弱音をはくようになる。私は、4月にはすでに化学療法を停止していた。そうしたこともあって、「続けたほうが良いですよ！」と言う程度、中央大学

IAEAは福島県で何するの!?

――事故の過小評価は許しません！――

事務局の連絡先：「フクシマ・アクション・プロジェクト」

〒960-8055　福島市野田町6-12-21（佐々木方）　TEL：080-5563-4516　FAX：024-535-0909

会費の送付先：ゆうちょ銀行普通口座【記号】18290【番号】36818671【口座名】フクシマアクションプロジェクト

卒業の原さんのお嬢さんが同病院勤務と聞きなんとなく安心していたと言うこともあり、「絶対つづけた方が良い！」とはすすめなかった。

5月7日突然、訃報が知らされた。

吉岡史郎さんとは、2010年11月中野駅北口ひろばで毎年おこなわれてきた「チャランケ祭」で出会ったのが最初ではないか。

第一印象は、私よりずいぶん若いであろうに大人びていること、第二に、ずいぶんお酒が好きな人と感じた。

私は、すっかり彼のきさくさと人なつこさにほれこみ、即座に、革命的共産主義者同盟再建協議会機関紙『未来』の定期購読者となることを約束した。以来、雑誌『展望』『オキューパイ大飯』など購読をつづけた。

吉岡史郎さんと「チャランケ祭」でうちとけた雰囲気となれたのは、白井朗（山村克）追悼集会や守田典彦（青山到）『革命の革命』の出版パーティに出席いただいていたことによる。この二つの集いは、相当の抗議や抵抗を覚悟で組織したものである。

この二つの集いに出席していただいた、それぞれに、特に吉岡史郎さんにとっては相当の覚悟を要求されたであろうことと思う。

彼らのこの覚悟こそが、私をして、うちとけた雰囲気のもとでのたわいのない世間話としてはずましたのである。

『未来』第119号に、奥田満（吉岡史郎）追悼文が掲載されている。感情のこもったとてもよい文章である。そして、吉岡史郎の人柄を現している。

同盟旗びらき

一月一三日三里塚芝山連合空港反対同盟旗開き報告

小山　明

一月一三日（日）三里塚芝山連合空港反対同盟は横堀農業研修センターに五〇名の結集をもって旗開きを行った。

旗開き終了後、参加者は東峰共同出荷場跡地に移動し、石井紀子さんの発言を受けた後、「年間三〇万回飛行をやめろ！　東峰住民追い出しを許すな！　団結小屋破壊弾劾！　一坪共有地を守り抜くぞ！」のスローガンの下、三里塚空港に反対する連絡会による東峰現地行動をおこなった。

以下に旗開きでの山崎さん、柳川代表世話人、加瀬勉さん、清井弁護士の発言を掲載します。

山崎宏さん（労活評現闘／横堀地区案山子亭）の開会挨拶

それでは反対同盟の旗開きを始めたいと思います。昨年は我々にとっても色々なことがありまして、一坪共有地に対する空港会社の側の裁判による取り上げと言うことで、現在のところ東京高裁ですべて敗訴している、そしてこちらとしては最高裁に上告しているということです。それから一坪共有運動の連絡先となっている。横堀の団結小屋がやはり裁判によって撤去の決定がなされて、昨年十一月二十八日に強制撤去されました。

空港会社はこのように話し合いと言いながらも実質的には司法権力を使って土地を強奪し、そして拠点を破壊していくということをやっています。私たちはこうした敵の攻撃に対してこれまで以上の闘いを組む事によって抵抗していかなければならないと思います。

昨年の十一月二十八日の小屋の撤去の際には、反対同盟・支援の健在ぶり、底力というものを示すことが出来たと思います。そういうことで今年も頑張っていきたいと思います。

最初に反対同盟の柳川さんから挨拶をお願いします。

柳川秀夫さん（反対同盟世話人）からの発言

どうも今日はご苦労様です。まあ、あまりめでたくはないけれど、とりあえずおめでとうございます。いま山崎さんから話があったように去年は色々忙しい年でした。

その前に去年の暮れから今年の初めにかけて、小川むつさん、昔の婦人行動隊長が12月のはじめ頃になくなりました。それから一月五日とかいったけど、熱田一さんが亡くなって、私も直接連絡がなくて間接的だけども、なんか密葬するそうで公開した形はやらないということでして、会葬にも行かなかったんですけども、そういった昔頑張った老人が二人亡くなりました。そういう意味では昔からの反対同盟の幹部だった人はほとんどいなくなっちゃって、千代田に笹川英祐さんがまだ健在でいますけども、本当にもうみんな歳で交代していくという状況です。

そういう中で、さっき山崎さんが言ったように団結小屋の強制収用ですね、あれはね！　本当はああいうことは絶対にあってはならない状況なんだけども、やっぱり力の論理であって、強いもんは数というものの中でしか物事は進まないというのが世の中現状だとつくづく認識しました。だから、力の弱いものがやっぱり負けていくんだと、そういう中でいくら力のある者が力で押しても、人間を潰すことは絶対に出来ないわけです。そういう意味では去年の代執行の闘いも多くの人が集まってくれましたし、さっき山崎さんが言ったようにこちらの意気軒昂さをある意味では示せたという風に思います。それで今年もそういう状況の中では何があるかは分からないけれども、問題がある以上、頑張って行かなくてはならないし、今年も頑張っていきたいと思います。

余談だけど代執行の中で我々力弱かったけれども唯一五分に渡り合えたのは神様だよな、氏神様があって、おめれら、これ粗末にしたら絶対

罰が当たると、と言ったら奴ら神主にお祓いさせて、どこかに持って行ったな。最終的に神様は強いなと思ったな、神様とあと仏様だな、いま山崎さんが住まってる所のそばの、横堀の団結小屋の場所も上坂さんと江口さん、それから原さんの三人が入っているべ、あの三人の魂はあそこにいるんだよな、で、それはやっぱり三人だけではなくてよ、死んでも魂は残るっぺ、魂は罰があたるからよ、そういう意味で人間の生き様とその情念は絶対に絶えることは無いと言うこと、そういう意味で死んだ人も一つの勢力だからよ、だから、ここにいるのもみんな年配者だけども次のステップがある訳です。でもやっぱり闘う志がある限り、未来永劫、世直しできるまで頑張っていきましょう！

山崎さん

撤去された神様は、元々横堀現闘本部の先にあった道祖神なんですよね、それが空港会社が道路封鎖する前に私とか下山政江さんとかであれを持ってきて、とりあえずうちの小屋のとこに据え付けておいた訳です。それをこういう物は粗末に扱うと何が起こるか分からないという恐怖心があるせいだと思いますけれども、神主をよんでちゃんとお祓いをして、そこにあった道祖神の石標を大事に箱に入れてどこかに持って行ったということです。それと柳川さんの方から話がありましたけども、何人かの仲間が分骨されて闘う意思を示し続けているということで、小屋を追い出された私は、いまあそこのかかし亭にいますので、常駐の墓守としてずうっと住まい続けますので、ご希望の方はどうぞ申し出てください。続いて加瀬勉さんの方からお願いします。

加瀬勉さん（大地共有委員会〔Ⅱ〕代表）の発言

昨年の反対同盟の団結小屋と一坪共有地の強制執行に対して断固反対し、抗議します。

年を越していま新年を迎える訳ですが、決意を新たにして、寸土我々は従来通り争っていく、その決意を私は固めたいと思います。強制執行を受けたという手紙を出しました。加瀬勉永遠に青春であり、先兵である！　と。現場指揮を久しぶりに柳川君や山崎君とやったんですが、やはり闘争をやりますと、想いとしては一〇年くらい寿命が延びた、そういう想いです。鬱積した物が表に出て感情とか生命とかがのびのびしてくる。よほど三里塚闘争が好きだなと、ですから七九歳になりますが、一生青春・一生三里塚の先兵！　この決心をいま新たにしています。二・三私が気がついたことをこれから述べたいと思います。

加瀬さんはこの後、民主党、共産党、社会党、総評を批判した後、

さて、社会党やら共産党、民主党を笑う訳にはいかんでしょう。我々の三里塚戦線を担ってきた新左翼諸党派、これ、あんまり中身のこと言いたくないけど、頑張っているから、何にでも、だいたい私の目から見たら胡散霧消、本当に三里塚の新左翼の諸党派の全国戦線の統一のためには神経を削って参りました。本当に！　寝る暇も無く、意見の調整に行ったり、行動の調整に行ったり本当に苦労しています。それが今やこの体たらく、だから人を笑うことは出来ない、自らの姿勢をちゃんとしなけらならん、私そう思う。

三里塚闘争の栄光を担った新左翼諸党派と言われる人たちは、権力を追い込んだ訳ですよ！　それは自信もっていいと思う。でも、その栄光にぶら下がったり過去にぶら下がっている訳にいかんですよ！　政治というのは生き物ですから、現実に対してどういう風に対応するのかということが問題になる訳ですよ。ですからこれからも－柳川君や鉄塔の下に土地空いてますからどうぞと山崎君と二人で言ってるから次は俺かなと考えているんですが－決意固めて、命ある限りやっぱり権力に対する肉薄を続けていく！

加瀬勉一生青春であると、以上です。

清井礼司弁護士の発言

弁護士の清井です。裁判闘争に絶大なご協力を頂きましてありがとうございました。ただ、振り返ってみてあんまり覚束ないというのが実感なのですが、特に十一月二八日、ちょっと裁判の関係で現場に立ち会えずに、溌溂とした加瀬さんの姿を見ることが出来ずにいま話聞いていて非常に残念だと思っています。いま加瀬さんの方から半世紀にわたる歴史が非常に凝縮された形で語られた。裁判闘争を通して古い昔の三里塚で溌溂としてやっていた頃の人々と－委任状集めの過程でね－コミュニケーションが取れたというのが一つの大きな成果だと思います。体は離れていても心は三里塚にあって、いざとなったらはせ参じてくれるだろうという期待をね、まあお互い年取っているからどこまで実現出来るかは別にして、そうした人々の心を三里塚に集める一つの闘いとして、敵側の攻勢を十分に活用すべきだと思います。

それから十一月二十八日の件は一つの新しい形態の攻撃を政府や空港会社は考えているのではないか、あれは空港会社が前面に立つのではなくて小野さんという元の同盟関係の方を無理矢理表に出して攻勢を仕掛けた、一つは平和的にやるという条件を、小野さんの処にはそういう義務はないので、小野さんを前面に押し立ててきた。彼は大きく言えば第二の犠牲者だという風に僕は思っています。彼が裏切ったのではなく、表に押し出されて役割を果たさせられたと、同じようなことがほかの地域でも出てくるのではないか？　特に空港会社が行政の中にまで入り込むということは地域の分断によって反対派を追い出してしまおうという形の攻勢の一つの前触れとして把握しておいた方がよいのではないか、そういう気がします。

それから、A滑走路が完成したという報道があったのですが、Bが伸びてAが完成した。次は横風をやるのかどうかと言うことが焦点化してくる訳ですけれども、横風にかかる一坪共有地それから横堀現闘本部これは絶対死守の決意を固めて、向こうの攻撃に対してどういう先手が打てるのか検討しなくてはいけないのですが、いざ裁判にかけられた場合に十分な陣形を今年は是非とも早めに作るという頭でいろんな活動を考えていきたいと思います。去年ちょっとうまくいかなかったことあるんですが、横風に対しては絶対に阻止するという決意で今年臨んでいきたいと思います。ともに闘いましょう。

寄稿

現代世界の動向と人民闘争の課題

北山　峻

（一）米欧日の凋落とアジアの台頭

2008年3月、「Revolveする世界」（新聞「ワーカーズ」に連載）という小論文の中で、私は次のように書きました。

「アメリカの衰退が一段と進んでいます。

一方で、中国・インドを先頭に、アセアン・ロシア・ブラジル・中東・中南米などの新興諸国の台頭も進んでいます。

そして今世界は、欧米列強が世界を支配した200年間にわたる一時代に終止符を打ち、再びアジアを中心とした新時代へと大きく回転（Revolve）しています。

歴史上、世界が物心ついた昔から、イギリスで産業革命が勃興した200年前までの2000年以上にわたって、中国・インドを中心としたアジアは、一貫して世界の生産力の7割ほども占める世界の中心であり続けてきました。

産業革命によって巨大な生産力を手に入れた西欧世界は、かつては雲の上の存在であったインドや中国へ進出・侵略し、アメリカやアフリカを蹂躙し、およそ200年にわたって世界をほしいままに支配してきましたが、今やそのような時代は過去のものとなりつつあります。

世界のわずかに10数％の飽食する「文明国」の対極で、貧困と飢餓と戦乱に苦しむ世界の85％の民衆の苦難はいまだ連綿として続いており、その解放の道のりには依然として多くの苦難が待ち受けていますが、しかし世界の民衆は、日々の労働と帝国主義と反動勢力に反対する持続的な闘争によって、解放に向けて大きく世界を一回転させようとしています。」

あれから5年、世界の基本的な流れは今も変わりませんが、しかし第1に、現在ではアメリカばかりでなくEUも深刻な金融危機と国家財政の破たんの危機の中にあり、さらに日本も欧米と歩調を合わせて通貨大増発という麻薬に手を出して亡国の道へと踏み出そうとしています。

しかし、それとは対照的に、中国やインドやアセアン、ブラジルなどの経済成長はその後も衰えず、中国のGDP（国内総生産）は国際通貨基金の統計（購買力平価）でも、2011年度で11兆3162億ドル、日本（4兆3956億ドル）の2・5倍を超えたばかりか、インド（4兆4698億ドル）も日本を超えて世界第3位となり日本は4位に転落、ブラジル（2兆3091億ドル）は、イギリス（2兆2536億ドル）やフランス（2兆2168億ドル）を超えて世界第7位に躍進しています。（第5位はドイツ、第6位はロシア）

そしてこれらに続いてアセアン諸国も年率5～6％で成長を続けていますから、かつては欧米に比べてはるかに遅れていると見られていたアジアは、中国やインド、さらにトルコやイランや日本、NIES（韓国・台湾・香港・シンガポール・マレーシア）などを加えると、今では総合力としても欧米世界を圧倒して成長を続けています。

中国などは、現在の年率7～10％のままで成長し続けるならばあと5～6年のうちにもアメリカを追い越して世界一の経済大国になるでしょう。

大づかみに言って20世紀はアメリカの世紀でしたが、21世紀は巨龍の中国と巨象のインドを双璧とするアジアの世紀であると断言できるでしょう。

（二）安部政権は日本経済を立て直せるか？

2008年秋、自らが組み込んだ腐ったサブプライムローンの破たんに端を発した国際金融恐慌の結果、世界中に触手を伸ばして収奪していたリーマンブラザーズやAIGなどのアメリカやヨーロッパの吸血鬼金融資本が次々に破産し欧米経済は大混乱に陥りました。そしてこの窮状から脱するためにアメリカは初の黒人大統領を登場させたばかりでなく、米国もEUも共に、この4～5年でそれぞれ500～600億円もの大量の通貨（ドルやユーロ）を増発して倒産寸前の金融資本や巨大産業資本（GMやフォードなどの）に投入し、何とか大崩落の危機をしのいできたのです。しかしその結果、ドルもユーロもその価値はこの5年の間に2～30％も下落し、もはや国際基軸通貨としての権威は完全に失墜し、ずるずると底なし国家財政の危機の泥沼の中へと沈みつつあります。

日・米・欧の旧帝国主義ブロックの中では、唯一底なしの財政出動をしてこなかった日本でしたが、ドル安・ユーロ安＝円高株安の進行の中で、中国や韓国・台湾・アセアンなどとの国際競争の中で衣料や電化製品ばかりでなく自動車や造船・電車や新幹線などの基幹産業部門においても次々に敗退を余儀なくされ、国内産業の空洞化、地方都市のシャッター街化が急速に進行しています。

さらに、バブル崩壊以来の20年で20％もの急激な総賃金のカットと年間200万円以下の労働者や生活保護世帯の急増、若年労働者のパートタイマーや失業者の増大、少子高齢化による老人家庭の増大と年金保険制度の破産の見通しなどの社会不安の増大の中で、ついに日本帝国主義も我慢しきれず、安部内閣は、日銀に圧力をかけて10年で200兆円に及ぶ土建業への投資（国土強靭化計画）を手はじめに、アメリカやEUの後を追う形で通貨の大増発によるインフレ政策に突入し

ようとしています。安部政権の経済顧問（内閣官房参与）で、白川日銀総裁の恩師を自称するイエール大学名誉教授の浜田などは底なしの通貨増発を主張しています。

しかし、この通貨の大増発によるインフレ政策によって景気が上向くかというと、食料品やガソリンなどの値上がりで貧乏人がますます苦しくなるだけであって、主要な基幹産業が再び国際競争力を取り戻して活性化する、つまり日本中の主要な工業地帯が再び活性化するのでなければ日本資本主義が立ち直ることなどあり得ないのです。

だから、この5年間、ドルやユーロを大増発して金融資本や産業界にカンフル注射をしてきたアメリカやEUは、5年前より良くなっていないばかりか、逆に今アメリカも、ギリシャも、ポルトガルも、深刻な国家財政破綻の泥沼に陥っていますから、安部政権の登場によって日・米・欧の旧い帝国主義はそろって国家財政破綻による危機に陥り、その危機から脱出するために、いつか来た道を再び辿って、戦争政策による軍需産業の拡大と核武装化の道を進んでいくことになるのです。

安部政権は、尖閣列島に火をつけた極右の石原＝橋下新党と同様に、今から、憲法改悪による自衛隊の国軍化と中国に対抗しての軍事力の強化、集団的自衛権の承認と海外での戦争の合法化、核武装化を昔から公言しており、衣の下の鎧が見え隠れしています。

ちなみに、キッシンジャーのスポークスマンとなっている日高義樹によれば、アメリカからの自立しか言わない社民党や共産党に比べて、石原慎太郎がアメリカの保守政治家の間で信用があるのは、慎太郎が「日本はアメリカから独立すると同時に独自に核武装する」と主張しているからだというのです。

日本の反動的支配層は、福島原発事故でさえ、原発被害者や被災地域は適当に放置しながらこの事故によって得られた膨大な放射線被爆資料を最大の秘密情報として活用し、世界の原発開発市場で優位に立とうとしているのです。

原子力は今後数十年から数百年にわたって人類を破滅に陥れ、地球を破壊に追い込む危険のある最高に危険な物質的力ですから、これをどのように管理するかは、人類が直面する最重要問題でもあるのです。だから我々は、今回の原発事故をテコにして、まず日本全国の原発を即時停止するとともに、世界中の原発を廃止する際の最も効果的な廃炉技術を獲得するために全力で取り組む必要があります。

（三）アメリカから独立し、アジアと連帯し、平和的発展の道を進もう

「太平の眠りを覚ます蒸気せんたった四杯で夜も寝られず」以来の日本の植民地化という幕末の大騒動の中で、1854年に米・英・露との間に結ばれた安政和親条約という不平等条約を解消するために、明治政権は1910年まで実に56年かかりました。

しかし現代日本においては、第2次世界大戦で占領され、さらに1950年のサンフランシスコ講和条約と同時に結ばれた日米安保条約以来、アメリカによる日本の従属状態は実に62年に及んでもいまだ解消されずにいます。ロシアによって支配され続けたポーランドや東ドイツ、ルーマニアなどの東欧諸国の隷属状態も、1989から91年の東欧革命とソ連の崩壊の中45年で解消しましたから、世界の中で情けない状態にあるのは今では日本や韓国、アイルランド、アフガン、チベット、チェチェンなどということなのでしょう。

急速に衰退するアメリカは、日本を手放さずこれを使って中国に対抗し、発展するアジアに介入して延命を図ろうとしています。そのために、CIAと一体になった外務官僚や検察官僚を動員して、辺野古やオスプレイなどを強行し、アメリカから自立しようとする小沢一郎や鳩山由紀夫などの保守政治家をも潰しにかかっていますが、しかしかつての田中角栄のように一挙に潰しきれないのは、彼らの力そのものが弱体化していることを意味しています。

この10年、アメリカと一体となって破滅の道を行くのか、それともアメリカとの不平等条約を解消し、発展する中国やアセアン・インドなどと協力してアジア統一市場・アジア共同体を作っていくのかが烈しく争われるでしょう。

最後に、平和で堅実な日本を建設するその産業の土台には、農業、水産業、林業の第一次産業を何倍にも強化して据えねばなりません。

産業革命以降、世界的な帝国主義の略奪方法は、工業による農林水産業の支配と圧迫、つまり国内においても農業を収奪するとともに、海外でも「先進国」の工業製品で「後進国」の農林水産物を買い叩いて搾取・収奪することでした。

そして現代でも、米・欧・日の帝国主義国は、工業製品と農産物や資源の徹底した不等価交換によって、世界の85％の貧民から食料を強奪しているのです。

だから、このきわめて歪んだ世界を根底から覆すためには、資本主義の原始的蓄積期とは反対に、国内においても、工業によって得た資金を逆に農林水産業に大量に投下して、農林水産業を全面的に発展させねばなりませんし、海外でも飢えている子供たちから食料を取り上げてくる今日の状態を一日も早く止めねばなりません。日本は、世界を略奪する15％の中にいることを忘れてはなりません。

この根底的な産業構造の転換なしには、世界と共に日本が平和的に繁栄していく方法はないというべきでしょう。

第15回大豆畑トラスト運動全国集会
地域で守られている種子を次代に継いでいこう
『よみがえりのレシピ』監督
在来種について語る
日時：2013年2月15日（金）
12：00～16：30
会場：渋谷リフレッシュ氷川
渋谷区東1-26-23 渋谷駅下車徒歩10分
参加費（昼食代含む）：1,200円
プログラム
12：00　昼食交流会
13：00　講演会
15：00　生産者リレートーク
主催
遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン
Tel 03-5155-4756　Fax 03-5155-4767

2012年
キネマ旬報文化映画部門
毎日映画コンクールドキュメンタリー部門
日本映画日本映画ペンクラブ文化映画部門
三冠獲得
ニッポンの嘘
報道写真家　福島菊次郎80歳
2013年3月30日
烏山区民センター3階集会室
1回目　14：00～／2回目18：00～
（入替制／ゲストトークあり）
上映協力券：1,000円
主催：『ニッポンの嘘』世田谷上映実行委員会
問合せ：TEL&FAX 03-5314-3502
e-mail：rwyjw794@yahoo.co.jp

『市民の意見』No.135　特集記事
反原発運動第２ステージ

市民の意見30の会・東京発行『市民の意見』No135号、（2012・12・1）特集2　反原発運動第2ステージ　より全面転載である。

市民の意見30の会・編集委員会の好意と大賀　あや子さん、八木　健彦さんの好意によって転載することができました。

関係者の皆さまありがとうございました。

私が、皆さまに転載をお願いしたのは、大賀　あや子さんの次の一文によるものです。

『「原発事故子ども・被災者支援法」が2012年6月21日に国会で成立しました。これは2011年から、市民団体等の働きかけや国会議員有志の研究も続き、与野党超党派の議員による議員立法にまとまり、国会全会一致賛成で成立しました。福島や市民の思いのつまった「画期的な法律」です。』

「原発事故子ども・被災者支援法」の成立をこれほどまでによろこんでおられるということにおどろきました。このことをどう考えれば良いのか、このことをどのように私自身の活動に活かせるのか。このことをどうしたら有効に活用しきれるのか、考えればきりがないほどです。

私が導きだした方針の一つは、今夏の都議選と参院選にしかり参加しようということです。私はこれまで、アイヌ民族代表・萱野茂選挙をたたかった以外積極的に国政選挙に関わらなかった。

私を変えた一文として、大賀あや子さんの文章の転載をそれぞれにお願いしたということである。（編集子・H）

1年8ヶ月が経ったが
――福島の現在――

大賀あや子
ハイロアクション福島原発40年実行委員会

終わらない原発震災

福島第一原発の現場について冷温停止状態・収束と誤った宣言がされ約1年が経ちますが、まったく収束・終息などしていないことを改めて強調したいと思います。数多い地震余震の度に爆発当時の恐怖がよみがえり、身構えなくてはなりません。3号機4号機の使用済み核燃料プールが損壊したなら……1・2・3号機からまた大量の放射性物質が噴き出したなら……現在もふだんから、1～3号機では炉心溶融～メルトスルーしたデブリを毎日480㌧の冷却水で冷やし続けつつ、それが爆発大破損箇所から大気中へ毎時1000万ベクレル毎日2億4000万ベクレル放出され（東京電力発表）、下部の破損箇所から地下（そして海中）へ汚染水がしみ込み続けています。

原発震災の「始まった」2011年3月に極大量に放出され、南東北へ関東へその先へ拡がった放射性物質は、山、田畑、家の屋根、学校、道路、街路樹……環境のすべてに降り積もり、風に舞い、雨に流れて、水道や煙突や様々な流れでも移動し続け、雨樋、敷石のすき間、苔類、側溝、窪地、川の下流……と様々なところにホットスポットが出現し続けています。削りとり洗い流す「除染」で放射線量が下がっても、また少し上がっていく例もあります。少しでも被曝を減らそうとすれば、マスク、衣服、歩く場所、洗濯物、換気、もちろん飲食物……あらゆる生活の場面にわたる制限となり、疲弊してしまってあるいは諦めて「普通の生活」をすることも無理なのかと思ったりします。行政やマスコミは毎日毎日「復興がんばろう」「風評に負けない」と叫び続けています。

そんな中で福島市が2012年5月実施9月発表したアンケートに注目しました。回答者の34％が「できれば避難したい」と答え、「以前はそう思っていた」人も31％。食物の線量と産地に気をつけることを「実行している」70％、「以前に実行していた」15％……と、声なき声が今でもはっきり現れています。

いのちを守る活動の広がり

3・11直後から、避難を呼びかけ、汚染の実態を明らかにし、除染を試み等、休みない市民の活動がありました（＊1）。

「いのちを守るために」初めて立ち上がった人々ともつながり広がっていきました。真実を知りたいと学習会講演会を、健康相談会を開き、放射能測定室を作り、自治体へ働きかけ、市民メディアで伝えていきました。

広く日本中で展開される子どもたちの保養プロジェクトや避難移住の支援（＊2）、障がいを持つ人々を支えるネットワークの力もありました。

子どもたちの集団疎開を求める裁判（＊3）や、国連の人権報告に働きかける取り組みも続いています。

「この被害を繰り返してはならない」と、脱原発を求める行動にも続々と参加しています。

福島県内全10基の廃炉は、2011年9月県議会でも決議され12月の県復興計画にも掲げられています。

原発事故子ども被災者支援法を生かそう

この9月に公表された「福島県県民健康管理調査」の子ども甲状腺検査結果を重く受け止めています。平成23年度実施3万8114人のうち385人、24年5～8月の集計者数4万4959人のうち385人に結節しこりが認められたが、5ミリを超えないものは二次検査の必要なしとされました。また、5ミリ以下の結節や20ミリ以下の嚢胞（のうほう）を認めた者、のべ3万1578人には「A2と判定しました（26年度以降の次回まで）2次検査の必要はありません」の一片の通知のみが届きました（＊4）。

早急な検査実施進行、検査データの完全通知、調査目的を『健康不安の解消』でなく『疾病の未然防止』に変更すること等を求めています。

「原発事故子ども・被災者

支援法」が2012年6月21日に国会で成立しました。これは2011年から、市民団体等の働きかけや国会議員有志の研究も続き、与野党超党派の議員による議員立法にまとまり、国会全会一致賛成で成立しました。福島や市民の思いのつまった「画期的な法律」です（＊5）。

この支援法には、「原子力政策を推進してきたことに伴う社会的な責任を負っている」として国の責任が明記され、これまでの政府指示の避難指示区域よりも広い地域を「支援対象地域」として指定すること、人々の在留・避難・帰還を選択する権利の尊重、特に子ども（胎児含む）の健康影響の未然防止、生涯にわたる健康診断および医療費減免などが盛り込まれています。医療費減免については「医療（東京電力原子力事故に係る放射線による被ばくに起因しない負傷又は疾病に係る医療を除いたものをいう）を受けたときに」と、立証責任が被災者ではなく国にあると定められています。

法律では理念や枠組みのみを規定し、政省令やガイドラインなどで実際の施行を規定していくこととなっています。現在、年内にも支援対象地域の範囲や被災者生活支援計画など「基本方針」を定める過程で、被災者の声を反映するための各種聴取会（民間主催で）等に力を入れています。皆さま、是非あらゆる機会に、有権者として関心、監視の目を示してください。

原発事故の刑事責任をただす

「福島原発告訴団」は、2012年3月に結成され、6月に福島県民1324名の1次告訴、11月に全国から1万3263名の2次告訴を福島地検へ提出しました。

原発事故を発生させた東京電力、そして原発政策をすすめ事故を防げずまた被害を拡大させた原子力安全保安院、原子力安全委員会、文部科学省などの関係者を、業務上過失致死傷罪、公害犯罪処罰法（人の健康を害する物質の排出）違反、激発物破裂罪により告訴・告発しています。事故を起こし避難を余儀なくさせたこと、日夜環境と食べ物から一定の被曝を強要し、心理的な不安を与え、今後一定の確率で健康被害が生ずる危険性を引きおこしていることの総体が被害であると主張し、「告訴人一人ひとりが自分の被害を訴えよう」と呼びかけ、輪を広げました。

検察側は8月に告訴預かりから受理、捜査開始に進みました。重要証拠の保全、主要な被疑者に対する取り調べ、そして起訴を実現させるため、告訴団としてさらにアピール等していきます。（＊6）

永く共に歩んでゆきましょう

3・10福島原発事故被害者の権利宣言の結びを引かせて頂きます。「私たちは、これ以上奪われない、失わない。私たちは、故郷にとどまるものも、離れるものも、支えあい、この困難を乗り越えていきます。私たちは、かけがえのないひとりひとりの幸福と、差別なき世界を創造し、未来世代に対する責任を果たし、誇りを持って生き延びていきます。」（＊7）

出典・参考　所収

＊1：ハイロアクション福島3・25緊急宣言 http://hairoaction.com/?page_id=201

＊2：ふくしま集団疎開裁判 http://fukusima-sokai.blogspot.jp/

＊3：3・11受入全国協議会 http://www.311ukeire.net/など

＊4：甲状腺検査の実施状況及び検査結果 http://www.pref.fukushima.jp/imu/kenkoukanri/240911siryou2.pdf

＊5：原発事故子ども・被災者支援法市民会議 http://shiminkaigi.jimdo.com/

＊6：福島原発告訴団 http://kokuso-fukusimagenpatu.blogspot.jp/

＊7：3・10福島原発事故被害者の権利宣言 http://hairoaction.com/?page_id=1323

経産省テントひろばの今、これから

八木健彦
経産省前テントひろば・広報担当
再稼働阻止全国ネットワーク・事務局員

日常と化したテントひろば

経産省前テントひろばが生まれてから、1年2ヶ月ほどが経った。1年間は何十年間を圧縮したような本当に疾風怒濤の日々であった。今ではこのテントは霞ヶ関の日常の風景である。そこにあって当然のものというように。そして金曜行動も一時期の人数と熱気からすれば落ち着いているとはいえ、毎週当然のようにおこなわれている。官邸前・国会正門前、経産省前、文科省前、規制庁前等の行動は、金曜日の夕方そこに行けば必ず人々と出会い、行動に参加できる日常の光景である。金曜行動以外にも月曜＝関電支社前、火・水＝経団連前、水＝文科省前と何ヶ月間も抗議行動がおこなわれている。

反＝脱原発のために霞ヶ関～永田町近辺で集い、声を上げ、意思表明することは今では特別のことではなく、日常的に持続していくことなのである。この風景の背後には、全国百数十ヵ所に広がっている金曜行動があり、至る所で繰り広げられている大小様々な行動がある。だから官邸前や国会前でのスピーチではいつも遠方からの参加者の声が聞かれる。

かつては非日常的な、それ故ある種の新鮮な響きと興奮を伴っていた行動が、今では日常的なものとして持続する。それは今、反＝脱原発運動が〈次〉をめぐってギリギリした持久戦の最中にあることを示しているのではないだろうか。そういう中でテントでは世界に向けた情報発信力を高め、国会議員を脱原発でテントに結びつけることや、福島の声を世界に向けて発信するために、テントTV「あおぞら放送」を毎週金曜日16時から1時間有余で放映している。

（視聴アドレス：http://www.ustream.tv/channel/tentcolor）

再稼働をめぐる持久戦中のひろば

大飯原発再稼働を機に大規模に発展した反＝脱原発運動と世論の高まりは、原発ゼロを視界に引き出し、政治の舞

伊達市立富野小学校　宍戸校長先生　講演会
「移動教室の試み」から教育を考える
～福島っ子、新潟に行く～
講　師：伊達市立富野小学校　宍戸仙助校長先生
日　時：2013年2月24日（日）
13：30～16：30（受付開始13：00）
会　場：生活クラブ館（経堂）
資料代：500円／定員100名
主　催：福島の子どもたちとともに・世田谷の会
講　演：世田谷区教育委員会
問合せ：03-3327-7142（NPO僕んち）

台でも脱原発の流れをつくり、政権をして原発ゼロを口にせざるを得なくさせた。もっともそれは羊頭を掲げて狗肉を売る類のものであったが。

そういう類のものであったにもかかわらず、財界・米国・自民党等はそれを攻撃し、政権もすぐ口をつぐみ、現実には大間原発建設再開や原子力ムラ（＋警察官僚）に占められた規制委→規制庁の発足と再稼働への態勢づくり、核燃サイクルの継続という事態が進行することとなった（規制委はつまるところ再稼働のための機関である。あまりのデタラメさからもう少し厳密にして再稼働していこうということに他ならない）。

さらには尖閣諸島を演出した領土ナショナリズムの大扇動でもって自民党の安倍・石破という核武装論――潜在的核抑止論からする原発推進ラインが台頭し、近づく総選挙では安倍内閣が登場すると取りざたされる状況が政治の表層を覆っている。底流ではJAの脱原発決議や全国津々浦々に広がる行動等、脱原発への流れは拡大しているのであるが。

現在の持久戦は、社会の中に底から湧き上がってくるように形成されてきた意志（脱原発への社会転換の意志）と、表層の政治を支配している意志（国家意志）とがひずみとねじれを起こしてぶつかりあい、どちらが主導権を握るかでせめぎ合っているということであろう。そのせめぎあいは来夏あたりに煮詰まっていく再稼働をめぐる攻防へと凝集される。原発推進か原発ゼロかはつまるところ、この再稼働を巡る態度へと収斂されざるを得ない。再稼働を阻止し抜くことによって原発ゼロをたぐり寄せ、一方では国政の転換へと現実化させていき、他方では社会の転換を創り出していく力としていくこと。

福島、原発現地と連携して闘うひろば

再稼働を阻止していく上で土台となるのが「福島を忘れない！　福島を風化させない！　福島とともに生きる！」ということである。なぜなら〈福島〉こそ原発の真実をさらけ出し、今も進行中の原発災害であり、〈福島〉こそ脱原発へと向かう「国民的」原体験だからである（テントはこの間、福島と首都圏の交流に力を注いできたし、さらに強めていきたい。とくに郡山でのIAEA国際会議に対する行動には全力で取り組みたい）。

そして要となるのは原発現地（立地地域＋周辺地域）の闘いであり、それに連携する「消費地元」の闘いである。全国の原発現地（立地地域＋周辺地域）を横につなぎ、福島につなぎ、「消費地元」につなぎ、全国につないだ闘いの陣型として創り出されていかねばならない。再稼動阻止全国ネットワークはそのためのものである。

3・11は「現地」ということを大きく変えた。原発事故の被災は広大な範囲に及び、立地地域のみならず広大な周辺地域をも、なべて「原発現地」へと変え、日々直接に原発に向き合わされる地域へと変えた（だから、そうした地域で決定権を取り戻すべく、電力会社に安全協定の締結を求める声が高まっているのはけだし当然である）。

また一つひとつの再稼働がこの列島に住まう人々の生命と生活、社会の根幹に関わる問題として、全民衆的な、全国的な問題となっている。従って、一つひとつの「各地の闘い」がそれ自身、全国的な、全民衆的な闘いとしてある。そのことを現実のものとしていく連携・手だてとして再稼働阻止全国ネットワークが結成される。

さしあたり、大飯原発直下の活断層をめぐって大飯を止めよ！　ということと、30㎞圏防災計画をめぐって逆に安全協定締結（再稼働に際して当該自治体の同意を不可欠とする）の要求をもって電力会社を包囲することが主要な課題となる。

当事者としてのひろばの役割

私たち東京圏をはじめとする大都市圏はもう一つの現地であり、もう一つの地元である。とくに東京は政府諸機関・電力会社をはじめとする財界・政党・原子力ムラの中枢が集中し、情報が集中し、人工が集中しているとともに、寄生的な消費都市として最大の電力消費地（浪費地）であり、そういうものとして当事者であり、原発現地に対して加害性と責任を負っている。だから東京圏――大都市圏の運動は、つねに原発現地を意識し、原発現地とつながっていくことが必要であり、そうすることで全国的な媒介者としての役割、支援の大後方としての役割を果たしていくとともに、原発現地――全国の意志を政府・原子力ムラの中枢に対峙させていく役割を担っていくことになるのではないだろうか。

書評
「資本主義終焉の実相」への感想

旭　凡太郎

①〈共有すべき諸点〉

1　今日を「資本主義の終末」として、それを「資本主義の果たした役割の終焉」としてとらえる観点は基本的なものとして共有している。それはまた機械制大工業、なかんずく消費財・耐久消費財の発達とその「成熟」が生産の飽和・過剰生産、環境問題等にいたっているという指摘と連なって現代資本主義批判の前提となるものといえる。

2　そしてこの過剰生産、投資領域の狭隘化によって資本主義の金融・投機化なり、過剰人口の構造化なり、非正規労働等労働者使い捨て、を生み出しているという指摘はこの資本主義・帝国主義の直接的結果を表現していると考える。

3　一方機械制大工業のもとでは労働者は「精神的力能を奪われ」「精神労働と筋肉労働の分業の廃止という社会革命の中心課題」（p13）の指摘は資本主義批判――共産主義の前提となるものと考える。

4　そして現代資本主義の一つの特質である労働力再生産なり相互扶助的活動（育児、教育、学習、保健、医療、介護、福祉等）は基幹的活動になりつつあること。にもかかわらず資本主義のもとではその発展は不適合（私有財産・等価交換のもとでは）である、という指摘は現実的と考えられる。

5　そしてこうしたこと

の結果として今日「経済成長」信仰、自然科学信仰等のブルジョワ的価値観、統合イデオロギーが崩れつつある、という指摘がなされている。

これらはそれぞれ現在のグローバリズム、新自由主義、過剰生産、帝国主義世界の危機とわれわれの任務を考える場合重要な観点と言える。

〈深められるべき諸論点〉

〈労働力再生産」「相互扶助」と「労働者自主管理」との相互関係〉

② 他方深められるべき点も多くある。

当書では「自己保存欲求」、「物質的豊かさへの欲求」「人間関係性の豊かさへの欲求」を歴史的発展の三層構造、三段階として挙げることを特徴としている。

そして「自己保存欲求」なり「物質的豊かさ」を追求した資本主義が飽和化しその役割が終焉し、「人間関係性」の要求の時代として今日がある、とされている。そしてこの「人間関係性」として、育児・教育・学習・保健・医療・介護・福祉・自然環境保護といった「相互扶助活動」や「住民自治」が挙げられている。

ここでの人間関係性は、労働力再生産なり相互扶助なりと同義と考えられるが、

「労働力再生産」なり「相互扶助」なり（あるいは「住民自治」）は、労働者（自主）管理（「労働者自己決定」の発展としての）と相互関係にあるのではないか。それらは労働者（自主）管理の権利・能力・経験への相互保障の一環としてあるのではないかと考えられる。（ここでの労働者管理は、生産過程から流通・交換過程、そして社会・労働力再生産過程を射程したものであり、その一環として当該「企業」なり地域なりがある。）

各人における精神労働・管理的労働と物質的・肉体的労働の分離の固定化の止揚という問題もそれの一環といえるのではないだろうか。

〈労働者自主管理と各人における固定化された分業の止揚、の相互関係について〉

③ そして資本主義は生産手段、ならびに科学や分業をふくむ労働組織（ならびに交換）と労働を土地から（相対的に）分離し、それを資本の所有・支配・交換の対象とすることで発展したのであった。従って資本主義に対する人々（労働者）の自由・権利とは、（生産手段所有制のみならず）、各人ならびに全体の労働（と交換・流通）への管理運営権が基本となる。そして社会とそこにおける自分が何をなすべきか、何をなしうるかを考え、判断し、主張・討論し、決定・行動する経験と能力は、政治的社会的分野と労働における管理活動、科学的知識的活動、物質的肉体的労働、あるいは農業労働を移動する経験と権利と責任を経て形成される。社会はこうしたことを相互保障し、計画しなくてはならない。

〈自己保存欲求「物質的豊かさ」「人間関係性」の相互関係〉

④ こうして「人間関係性」を、労働者自主管理とそれの相互保障（社会的計画）を中心に考えた場合、その欲求（人間関係性）は最後（三段階）でもあるが最初でもあるとも言えるのではないか。

たしかに戦後、1960～70年代自動車・耐久消費財等の普及があり、ケインズ主義的福祉国家策があり、その代償としてテーラー・フォード・ME的資本の専制支配があった。過剰生産・飽和がこれに続いた。これを三段階でもじることはわかりやすい面もある。

しかしそれは戦後革命の敗北の結果、過程としてあったわけで、これに対し少数派であっても労働運動・労働者管理への欲求は続いた。（新左翼の登場自体がそうした戦後民主主義批判、「体制間生産力競争」への批判として登場した。）

あるいはドイツ革命とレーテ、イタリア工場評議会、戦後革命等あり、それらは自己保存・豊かな生活・関係性――自主管理等の要求が闘争過程でおりなしながら進行したといえる。

〈コンピュータとフォードシステムの末期と分業止揚の可能性〉

⑤ 同時にコンピュータによって「精神労働の代置」「精神的機能を労働現場に引き戻す」（p24　p15）といったことが想定されているようだ。

コンピュータは記憶、計算、フィードバック・自動制御、シュミレーション等の機能があるとされ、とりわけME化によって自動制御機能が導入されたが、そこで管理的・精神的労働が代替されているわけではないと考えられる。（事務、中間管理職は減ったとされるが）

管理的・精神的活動は、科学、創造性、諸機能のオルガナイズ、政治的社会的判断をともない、コンピュータ・システムがそれを代替できたとは聞かない。（ITでデモ・集会をよびかける等文化的機能はあるが）

闘争の経験や、自主管理の経験や、マルクスが強調したように「いろいろな社会的機能を……かわるがわる行う（資本論）」、すなわちある時は管理、あるときは物質的労働、ある時は精神的労働を、あるときは農業労働を移動する、といったことにかわることはできないと考えられる。したがってそれの相互的社会的保障ということが重要になる。

これらは、労働日短縮や、文化的教育的水準によって比較的容易化するとはいえ、自動的にすすむわけでもなく、運動、経験、論争、社会と個人の「全般的統制」なり目的意識性、をへなくてはならず、生産力発展（コンピュータ）等が万能薬ではないだろう。

（それ故ソ連からユーゴ、中国の経験あるいは失敗を、「資本主義の役割がまだ終焉しておらない時代だったから」、とかたずけず検証してゆく道筋を残しておきたい。管理の機能と管理の学校の一時的分離、労働組合論争、ネップ、一党一分派支配の固定化、ユーゴ型自主管理、中国文革での管理・分業止揚の論争等。）

スターリン主義といっても前近代的なものではなく、近代機械制大工業下での科学・自動機械・管理・分業・階層制のもとでの、目前の生産性・能力主義、階層制と差別、競争、機能・管理――指揮至上等の自然発生性にハイキしたものであり、それが一党一分派支配と結合したものであるから、スターリン主義類似は絶えず登場するのだ。（早くも共産党――不破哲三は分業批判をやめると宣言している（「マルクス未来社会論」）

――こうしたことから、労働者（自主）管理、分業止揚、コミューン型国家、等は分岐となっている。

〈産業・労働をめぐる支配構造という問題と、金融投機・（絶対的）過剰人口〉

⑥ そして、産業の成熟、過剰生産、ということ自体は正しいのだが、そこにおいて金融投機・「絶対的」過剰人口を二本柱として終末論的に展開してしまう場合には、産業・労働をめぐる支配構造・攻防ということと対立させてしまうのではないか。

（ハーヴェイの「新自由主義＝階級権力の回復」に対する「投機マネーヘゲモニーの軽視」という批判。p84）

ひとつには1970～80

年代以降の産業の成熟・飽和、過剰生産ということ自体が、戦後のフォード主義的生産のもとでの、発達した生産力を労働時間短縮、均等待遇、教育・福祉、排除・差別・貧困からの解放、労働者自身の自主管理能力と経験へと発展させなかった結果としてある。

むしろ近代科学、自動機械、管理・労働の単純化・階層制と差別、各種過剰人口等を支配の武器とした資本のもとへの労働支配強化と批判勢力――労働運動の排除、をとうした資本の専制支配という力関係、が蓄積されてきたのである。（その範囲で賃上げ、雇用、社内福利厚生制等を契約する関係はあった）

こうした力関係を背景として、1970年代末過剰生産・市場再分割戦激化・アメリカ後退とスタグフレーションのもとで、一挙に反革命的攻勢――契約型労働運動もの廃棄と新自由主義的労働支配（解雇、賃下げ、スト破り、非正規化等）を押し進めたのであった。（ハーヴェイのいう階級的権力の回復）

それは同時に多国籍企業化による延命――アメリカは1960年代からすすめていたが世界的には70～80年代――として拡大し、国際的階層的民族差別的な賃金・労働内容・管理・雇用・農村・過剰人口の国際的ヒエラルキー（フォードシステムの国際的・民族差別的輸出・拡大）としても進行し、労働者相互の競争の強制として、新自由主義的労働支配は加速・構造化してきたわけである。そしてその労働者切り捨ては、過剰生産構造を拡大するスパイラルにある。（多国籍企業化による旧第三世界の従属的工業化とそれによる帝国主義の衰退なり延命なりはここでは論じない。ただしそこで中南米、アジア、エジプト等階級闘争は勃興している）

〈多国籍資本と金融資本〉

⑦　こうしたことの上に、過剰生産と貨幣資本の過剰、蓄積が進行している。そのうえで金融・投機がある、といっても国際的金融自由化自身がこうした多国籍企業の自由展開の結果である。そして多国籍資本は膨大な投資収益があり、まずもって寄生的・金利生活者国家化であり（一次大戦前のイギリスや今日のアメリカ）、そのうえに国際的金融循環を利用しているという関係であり金融資本化しているのである。したがってレーニン時代は「生産の集積――金融資本化」、今日は生産の集積に立脚しない「投機マネーヘゲモニーの確立」「金融資本時代のおわり」（p83）と図式化することには疑問が残る。

また金融や通貨攻撃は一国をまるごと破綻させることをとうして当該国を思うままに解体再編する（1980年代の中南米債務破綻をてことした新自由主義的構造改革・民営化・多国籍資本への開放の強制や、98年のアジア通貨危機等。また今日のギリシャ）等、略奪的蓄積の尖兵の役割を果たすこともあるが、それも総体としての独占・金融資本・多国籍資本の活動の一環であり、古来から帝国主義・金融資本が借款等をとうして小国・植民地支配の橋頭堡としてきた常套手段であった。

これら多国籍資本の運動、略奪的金融資本の運動は不可避的に投機的性格を、ともない、そこにヘッジファンド等がからむわけである。

（ただし今日的特徴としては、一つには基軸通貨ドルの交換性停止によって、アメリカに見られるように無制限の国際収支赤字・ドル流出と――それは中国等の輸出促進をともなったのだが――、それによる膨大な資金の循環運動を加速していること、ならびに変動相場制によって投機の対象となっていることがある。）

他方信用の拡大――消費者信用、国債は、旧来のごとく信用→設備投資でなく、直接の消費むけ（住宅・自動車・公共支出等）であり、そうした信用なくしては過剰生産にたいする消費を維持できなくなっている構造を表してはいるが、それ自体は投機マネーでなく実需であり生産資本の実現である。（この国債、ローンの流通は投機の対象だが）

そうした構造は金融の拡大、投機ぬきにして発展できない現代資本主義の構造であり、またその結果としてサブプライムローン、ヨーロッパ国債等略奪や危機・投機がある。が、基本的には（過剰生産構造の上での）資本の新自由主義的労働者支配（その結果としての過剰人口ということをふくめて）、多国籍資本化、という支配構造が基礎なわけであり、それと貨幣資本の過剰・金融化をともない、それは投機をもともなう、という構造にあると考えられる。

⑧　もちろんフォードシステム型産業・労働支配の衰退があり、松平氏のいう「社会の崩壊」があり、資本の「知的道徳的ヘゲモニー」の衰退がある。（原発にしがみつく経団連のみじめさがある）

そうした「社会の空白」を埋めるのは松平氏のいう協同組合、社会的企業であったり労働運動であったり、政治運動であったりするだろう。実際労働運動では失業、非正規労働問題から、非正規労働の廃止（広島電鉄）や、組合・協同組合によるゼネコンの価格決定への介入（関ナマ）等労働者自己決定力の拡大（将来の自主管理につながるような）であったりしている。

それらはまだわずかだが、脱原発――福島～東京～現地をつなぐ闘い等をふくめて、資本・国家への全社会的規定力をもつようになるだろう、その結果としての将来の労働者自己権力への転化、というのが考えられる。

読書感想

羽山太郎

幾冊かの単行本と冊子の読後感を記する。

昨年の暮より他人にすすめられるままに買い求め、または送付されてきたリーフレットや冊子の読後である。

『アナキズム・カレンダー』

年賀の挨拶代わりに『アナキズム・カレンダー二〇一三――大杉栄・伊藤野枝・橘宗一虐殺九〇周年記念』このカレンダーは、夜半一人寝る前に〝しげしげ〟とながめながら床につく。夢ならぬ妄想を膨らませて熟睡することができる。

『ローカルこそ時代の最先端――鴨川から』

これは、40数年・いや50年になろうかとする友人・田中正治からのレポートである。

「共同体を求めた68年世代」「団塊ジュニア達の移住は半農半×」「サバイバル相互扶助システムとしての地域通貨」「派生したグループ」……等々、1ページほどつづく、この項目の羅列は、目次でもあり、レジメ風レポートのプロローグなのである。田中正治とはこの20数年間共通の課題を共有してきた、という信頼がある。このことは、このプロローグにおいて了解

されるところである。ここで展開されている実例は、房総半島での実践例であるが、ある種全国的にみられる傾向である。二本松市旧東和町にも、関元弘は、元霞ヶ関キャリア官僚である。関元弘は旧東和町役場に出向しつつも任期後もその地にとどまって、村おこし、地域おこしの一人として半農半×を生業としている。フクシマとなって2年、二本松市内にとどまり、より一層半農半×に力を注いでいるところである。

ところで、田中正治は、昨年11月17日、藤本敏夫没後10周年集会で大講演を行った。農のもつ力、地区・地域（自然・人間）の力について、そしてそれは「共同体的なる言語で語られると。――もちろんこの解釈は私の我田引水――である。

＝朝来市和田山より＝

『子ども・青年と・地球の明日を考えるあーす農場だより』が年賀代わりに到着。

石牟礼 道子、田中正造の詩ではじまるこの『だより』はチェルノブイリ原子力発電大バクハツの年に和田山町朝日に移住して以来つづくのである。『だより』の主は自称・縄文百姓大森昌也である。

『だより』が石牟礼 道子、福島菊次郎、田中正造や安藤正益などを語り、「共同体」を語ったとしても、私と根本的に、根底的に異なるもの、それは、大森昌也の出自にある。彼の被差別体験は、私にない実体験であり想像だに出来ないものである。

大森昌也は近年ますます「反戦平和」を希求しより強固に語ろうとしている。

90歳になる母が病に倒れその看護・介護のなかで父親の「遺言状」を眼にする。遺言状の日付は昭和二十年五月二十日である。大森昌也3歳時のもの。

「……敗戦色濃い昭和20年（1945年）5月21日に現地召集、兵隊にとられる。その前日に〝遺言状〟を残す。8月15日以降、外蒙古に抑留され、その年の11月30日に戦病死する。行年（死んだ時の年齢）31歳だった。」……

「天皇の命令！　天皇の命令で、侵略の先兵として銃を持ち、持たされながら、自らの〝責任〟を問い、死んだ父。自らの〝責〟を問うことなく生きてきた天皇。笑って、私を抱きしめる父に会いたかった！」

大森昌也の反天皇・反差別への想いは、『だより』の一読はもとより、単行本もすでに何冊か出版しているのでそちらの一読をもすすめるものである。

＝単行本の幾つか＝

『ウイリアム・モリスのマルクス主義』大内秀明、『共生経済が始まる』内橋克人、『協同組合の時代と農協の役割』蔦谷栄一、この3冊を相次いで読んだ。

大内秀明、協同組合論は昨年の春先から話題となっており東北で集会などもされたりした。しかしこの『ウイリアム・モリスのマルクス主義』を手にしたのは12月、『共生経済が始まる』は、斉藤與一郎氏から「内橋克人の共生論を学習しておけ！」と。そして、「福島にきたときは、内橋克人をネタに一泊しろ！」とすすめられ、これまた12月に購入した。蔦谷栄一の一冊は、3年前買い求めておいたが目次すら読まずにウッチャッテおいた。急遽、先の2冊を読むこととなり、協同組合の思想・協同組合の歴史を少しは知らなければならないと。しかも、農民連合・東京を結成（1995年）時、高見沢氏のレクチャーを何度か受けてはいたがすっかり忘れていたので改めて確認のために『協同組合の時代と農協の役割』を読んだところである。

人間が人間であるためにはどうあるべきか。人間が尊重される社会とはどんな社会なのか。①アナキズム・カレンダー、②田中正治、③大森昌也、④蔦谷栄一、⑤内橋克人、⑥大内秀明、これらから読みとれるのは、「物の価値・商品」の世界と対極をなす人間（自然）世界である。

毎週金曜日の首相官邸デモで永田町や霞ヶ関や官邸前。国会正門前でのスローガン・合い言葉は、「お金よりいのち！」「こどもを守れ！」「いのちをまもれ！」「経済よりいのち！」である。

うつくしの福島を「フクシマ」として全世界に発信したのは資本主義日本を防衛するため核抑止力たる原子核発電の爆発である。放射能の大量拡散・飛散である。「いのちより経済を優先した」結果である。

こうした資本主義的経済主義と対立する思想・哲学こそが先の6点の読み物である。

私の世界観は2007年「日本農業の復権」なる主題のもと公表した。

「日本農業の復権」と先の6点の読み物の接点はあるのか。スクランブルとして、幾つかの交点はあるのか。いづれ近日中（数ヶ月）に検証してみたいものと思っている。その時こそ真に書評たりうるであろう。それまでは、網羅的な読後感として容赦願いたい。

『アイヌ神謡集』を語る

大野徹人（様似町在住）の文章を久しぶりに読んだ。

『シロカニペ』知里幸恵、銀のしずく記念館、友の会通信No5に掲載された「『アイヌ神謡集』のルーツ」なる一文である。

『シロカニペ』は、知里幸恵生誕の地・登別本町に記念館の建設を望んでこられた関係者の努力によって4年前・開館の運びとなった。以来「記念館　友の会」となられた支援者向け通信が発行されつづけてきている。

『シロカニペ』は数ページの冊子であるが記念館を訪れた感想のみではなく、苫小牧郷土文化研究会の官夫靖夫氏、金田一秀穂氏など、毎年秋9月に開館を記念して講演していただいた先生方の講演録を中心としつ、それぞれの研究分野の論文が掲載されている。

大野徹人氏は、『アイヌ神謡集』に収められている神謡の幾つかは、各地域・地区に似たような物語としてあること、もちろん似ているとは、筋書きが比較的似ているということであって、登場するカムイ、宇宙、動物のことごとくが似ているということではないと。

「『アイヌ神謡集』という形で結実した、数々の珠玉の物語は、飢饉や災害などの苦難をくぐり抜け、時代や空間を超えて伝えられた宝物である。そこに、この北海道に代々暮してきたアイヌの悠久の歴史を垣間見ることができると思う」。

大野徹人の以上の結論は、アイヌモシリの、アイヌへの尽きぬ興味、好き心で一杯である。

大野徹人氏は、アイヌモシリ・アイヌへの知識が深まれば深まるほど、謙虚になっているように思う。物事を両断しない、断定的に断言しない。

大野徹人氏のますますの活躍を期待してやまないものである。

シロカニペ

誌名の由来

「シロカニペ」という誌名は知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』の梟の神の自ら歌った謡『銀の滴降る降るまわりに』の冒頭の有名な詩句「Shirokanipe ranran pishkan」（銀の滴降る降るまわりに）のShirokanipe（銀の滴）というお馴染みの単語を誌名としました。

「新たな捜査手法」に抗して

佐藤　保

昨年末の衆議院議員総選挙によって、マスコミの予想通り自公両党が全議員数の三分の二以上を獲得し第二次安倍内閣が誕生した。これによって安倍内閣は「憲法改悪」「核武装」「共謀罪」etc. 何でも出来る権力を手にしたのである。戦後民主主義は今日もっとも危機に頻していると言える。経済産業省前テントにしても然りである。年明けから、いつ強制排除に来ないとも限らない――緊張の日々が続いている。

こういう情勢の中、法務大臣の諮問機関『法制審議会』の特別部会「新時代の刑事司法制度特別部会」で部会長試案が公表された。1月20日、東京新聞の伝えるところによると、①えん罪防止の切り札とし期待される取り調べの録音・録画（可視化）で逮捕から起訴までの全過程の可視化を義務付けているのは、殺人などの裁判員裁判だけ――97％は対象外だ。これに対して、厚労省文書偽造事件に巻き込まれ、無罪が確定した村木厚子厚労省局長は「可視化にあまりにも消極的だ。とても残念だし不安。検察の取り調べだけでも全事件でやれないか」と本田勝彦部会長に迫った。もう一人の、痴漢えん罪事件を題材にした映画で有名になった周防監督も「一年半、一生懸命言ったことが何も伝わっていない」と不満をあらわにしたと言うことである。

その一方で「新しい捜査手法の導入には積極的で①通信傍受ができる事件の拡大、電話会社の立会の省略②司法取引刑事免責etc.。東京新聞ではここまでしか書かれていないが、一年半の審議の中では「改悛者制度、捜査協力型減免制度」「DNAデータベースの拡充」「データバンクへのアクセス」「潜行捜査（スパイ）、おとり調査」「無令状逮捕・捜索」「証人保護」（匿名証人）「黙秘の不利益規定」「被告に挙証責任がある」などがあげられていた。これらについても今後、取り入れられて行くのではないだろうか。

どうして、こういう事になったのか？

第一は構成メンバーのアンバランスである。検事・裁判官・9人、学者7人、メディア1人、被害者団体1人、財界2人（そのうちの一人が部会長）、弁護士3人、というもので70％以上が捜査側の人間で占められており多数決を取れば捜査側の意見ばかりが取り入れられて行くのは初めから判り切った事であった。えん罪被害者側として委員に選ばれた村木、周防の両人は利用されただけなのである。それを判っていて、あたかも全面可視化が可能であるかの如く幻想を振りまいてきた日本弁護士連合会の責任も大きい！

第二は、コンセンサスの放棄である。従来型の部会では部会長提案によってその原案の作成を法務省に依頼していた、そこでは、当局が大方の意見の方向性を勘案して原案を作成していた。今回は双方の意見の対立が激しく双方の見解を取り入れる事ではまとめられない所まで来ていた。よって多数意見という事で出していたのではないか！

「新たな捜査手法導入」策動は今回、初めて出て来たのではない、これには歴史があるのである。

95年、一連のオウム事件が起きてオウムに対し破防法適用（団体解散）請求手続きが行なわれたが、適用決定一歩手前の所で否決され解散できなかった。解散適用には厳格な要件があり、幹部がほとんど逮捕されていたオウムには再犯し得る強固な組織がすでに存在せず、適用するには無理があったのである。当時、日比谷公園で抗議の坐り込みやっていた我々の所に朝日新聞の記者が来て「オウムに破防法が適用される事が決定したと得意気に報告したものである。我々は「それはおかしい、お前は権力の回し者か」とどなってやったものである。翌々日破防法適用は否決され朝日の腰巾着ぶりが露呈したのを今でも鮮明にも思い出す。

これに懲りた権力は、「今の法律は利用しにくい、もっと使い勝手の良い法律がほしい」とばかりに「オウム、住専を契機として組織犯罪に対する法制度を求める動きが急浮上している」「国際的にも組織犯罪に対応する法制度を整備すべきであるとの圧力が強くなっている」（96・3）「匿名証言・刑事免責を導入」報道（96・3）「法務大臣、組対法整備につき法制審へ諮問」（96・10）「組対法3法成立」（99・8）「法務省、組対法抜本改正（刑事免責・共謀罪導入）を打ち出す」（00・4）「国連、国際組織犯罪条約採択」（00・10、日本12月に署名）「米、01・9・11テロ、10月、米愛国者法成立）。

9・11テロ～米愛国者法成立が契機となり、世界的に対テロ組織壊滅へ向けての取組みが強化され今日に至っている。日本おいては「共謀罪」成立が執拗に策動されてきたが世論の反対の前に3回とも廃案になっている。

こういう中で、「新たな捜査手法」制定が繰り返し策動されているのである。

「米愛国者法」は9・11テロ直後に極めて短期間（米国人の復讐世論が沸騰している間）に成立したもので、半年後に米国世論はその成立を後悔したものである。ここには今、「新たな捜査手法」と言われて論じられているものがすべて含まれている。だから日本の捜査当局も米愛国者法で許されているものは全て「ほしい」と考えて提出してきているのである。これらが許されたら日本は戦前に戻ってしまうであろう。

試案は3月まで部会で論議され4月以降、世論工作が徐々になされ、来年4月に上程されていくとの事である。共謀罪法案の時と同様に、種々の民主的団体を団結させて廃案にさせていかなければならない。

お詫び

前号『プロレタリア通信』52号において、重大な誤りを犯した。

編集上の執筆上の責任は、羽山太郎にある。

書評Ⅰでは文章上で、書評Ⅱでは執筆者名で間違えた。

渥美文夫とすべきところを「濃」美文夫と間違えた。

『金日成・金正日体制と東アジア』

著者　渥美文夫・現代企画室出版、が正しい表記である。

誤記・訂正し深くお詫びするものである。

著者、出版社はもとより旧知の関係者、そして『プロレタリア通信』読者の皆様に重ねてお詫びするものである。